

新刊紹介

インフルエンザ危機 (クイズ)

河岡義裕 (東京大学医科学研究所ウイルス感染分野) /

発行: (株)集英社 / 〒101-8085 東京都千代田区一橋2-5-10 / 03-3230-6393 /

A 6 判 / 172頁 / 価格 660円 (税別) / 2005年10月19日発行

インフルエンザが流行している。最も怖いのは新型のインフルエンザである。本書は、普通のインフルエンザとの違いは、なぜ怖いのかなどの疑問について自分の母親が読んで90%理解できる本にしたいとの意向で、インタビュー方式で平易にまとめられているが、それでも難しいところも見られる。

まず人類とインフルエンザウイルスとの付き合いが有史以来から始まり、21世紀に入っても戦いが続いているが、いまだ撲滅に至っていないこと、その間、このウイルスは次々と姿を変え、驚異的な伝播力で、一挙拡大して世界的大流行(パンデミック)を引き起こし、多くの人命を奪ってきたとの書き出しで始まり、研究者の間では、新型インフルエンザウイルスによる新たなパンデミックが間近に迫っているという共通認識を持っていると述べている。また、鳥インフルエンザに代表される新型ウイルスが人に感染・流行する危機さえ叫ばれており、本書では、インフルエンザウイルス研究の足跡や特徴を紹介し、来るべきインフルエンザウイルスパンデミックへの対策、対処法に言及している。

その内容は次の5章から成り、各章に「ウイルス豆知識」を設けて理解を深める工夫がなされている。

- 第1章 新型インフルエンザの足音
- 第2章 さまざまなインフルエンザウイルス
- 第3章 インフルエンザVS. ウイルス研究者
- 第4章 インフルエンザウイルス研究最前線
- 第5章 新型インフルエンザから身を守るには

次に主なサブタイトルを記すと、第1章では鳥インフルエンザの日本上陸、それはどこから来たのか、人にうつる可能性は、鳥 豚 人のウイルスリレー、アジア諸国の鳥インフルエンザ事情、新型ウイルスの足音など、第2章では著者のインフルエンザウイルスとの遭遇、野鳥のフンを調査せよ、インフルエンザウイルスの型分けなど、第3章では人類対インフルエンザ攻防史、インフルエンザウイルスの個性、パンデミックウイルスの脅威、世界規模の新型インフルエンザ対策、アメリカと日本の研究事情、有能なウイルス研究者

の条件など、次いで第4章では人を襲い始めた鳥インフルエンザウイルス、インフルエンザウイルスの人工合成に成功、インフルエンザウイルスは生物兵器になりうるか?、日本でのウイルス研究の問題点など、さらに第5章ではインフルエンザは世界の人口を左右する、インフルエンザ予報の的中率、日本のワクチン事情、社会的なインフルエンザが予防対策だったワクチン学童集団接種、抗インフルエンザ薬の効果など興味ある項目が並んでいる。

本書は、著者の研究生生活の経験を中心に書かれているが、以下、インフルエンザウイルスの一部分を要約する。インフルエンザウイルスにはA、B、Cの3つの型があり、日本で主に流行するのはA型である。A型にも多くの型があり、人のほか、ニワトリ、ブタ、アザラシなどもかかる。渡り鳥のカモはすべての型にかかるが、発病はせず、フンからA型ウイルスが見つかることから、渡り鳥とともに世界中に運ばれている。電子顕微鏡でA型を見ると表面にHA（ヘマグルチニン）とNA（ノイラミニダーゼ）とよばれる2種類の糖たんぱく質がスパイク状についており、HAは1~16、NAは1~9の亜型があり、その組合せで、かかりやすい動物が変わってくる。人がかかる組合せはH1N1（スペイン風邪）、H2N2（アジア風邪）、H3N2（ホンコン風邪）の3種類であるが、毎年少しずつ「変異」が起き、時々大きな変異が起きることがあり、これを新型インフルエンザと呼んでいる。その有力候補がH5N1で、ニワトリがかかる鳥インフルエンザである。04年に京都などの養鶏場で流行し、社会問題にもなった。このウイルスが変異して人にうつる性質を獲得すれば、パンデミックが起きる恐れが出てくる。97年にH5N1に感染した患者が香港で見つかり、その後、タイやベトナムで見つかり、死者も出ているが、人から人にうつった例は少ない。しかし、今後、鳥のH5N1と人のH3N2がブタを介して両方の性質を有する新型ウイルスが生まれる可能性も高く、既にブタからH5N1が見つかっており、パンデミックへの導火線は短くなってきている。また、巻末には新型インフルエンザから身を守るための（生）ワクチンや抗インフルエンザ薬「タフミル」の効果、耐性ウイルスにも触れられており、是非一読をお薦めする。

（学会事務局）